

風と煙を伴にして

—1960年代 汽車の旅—

第三版（完結編）

北田 稔彦



・宗谷本線 おといねづ 音威子府

てんぼく 天北線との分岐点。数多くの側線があり、貨物列車の到着、出発でにぎわう。



・宗谷本線 もんぼない 紋穂内

旭川から北へ105kmの小さな駅。

稚内行き普通第327D列車の車窓より。

てしお 天塩川に沿って

旭川を発った宗谷本線の列車は遠く大雪山系の山並みを見ながら、水田の広がる上川盆地を走る。

塩狩峠を越えると天塩川の流域となる。内陸のため、冬は寒さが厳しいが、初夏の六月には、悠然と流れる天塩川と緑に包まれた大地が車窓に展開する。

一つひとつの駅には花壇が造られ、草花が咲きそろう。

列車は旭川と稚内のほぼ中間点にある天北線との分岐点、音威子府に着く。

石炭、木材、農産物を積んだ貨物列車が発着する。

まわりの山は、六月というのに、ようやく新緑になったばかりの景色。

この美しい自然を背景に、生き生きと活動する鉄道の姿。この光景がいつまで続くか、ふと不安になる。

(昭和四十二年)



・仙台駅

ホームの奥に扇形の機関庫がある。駅前の丸光デパートの展望台(ガラス張り)から撮影。



・仙山線 陸前落合

仙台発山形行き普通第823列車。機関車の次に、石炭焚き暖房車を連結。

・天北線 浜頓別

上り貨物列車の到着。沿線は木材、石炭の出荷が多い。



・天北線 山軽

音威子府発天北線まわり、稚内行き普通第725D列車の車窓より。湖と森の風景が続く。



浜頓別の森と湖

夕方、音威子府から天北線の気動車に乗る。車窓にシラカバの林と牧草地が流れる。小頓別という小さな駅では、歌登町営軌道の、マッチ箱のような気動車が乗り換えた客を乗せて木立の中を走り去るのが見える。

天北線の車内では、乗り合わせた地元の人達とすぐ打ち解けて会話がはずむ。内地には観光旅行で奈良に行ったこと。とても暑かったこと。そして、牛の話、牛乳の話等々。

車窓に夕焼けの空が映える。

日が暮れて浜頓別に到着。駅長さんに紹介をお願いして、駅に近い旅館に泊まる。翌朝、シラカバの薪が燃える食堂で朝食。夏は薪、冬は石炭ストーブとの事。美味しい鮭の切身と御飯を腹一杯いただく。

六月の爽やかな風の吹き渡る中、再び天北線の気動車に乗って北へ。なだらかな大地の起伏の中に森と湖が次々と姿を現す。どこか北欧のローカル線を走っているのではないかと錯覚する。

(昭和四十二年)

晩秋の山里を行く

十一月初め、仙台駅から仙山線山形行き
の列車に乗る。

東北の山々の冬の訪れは早い。全山燃えるような紅葉が終わりに近づく。朝晩は冷え込むようになり、車内は暖房が欲しくなる。

当時の客車の暖房は、電気暖房よりも、スチームが一般的である。そこで電気機関車に蒸気発生装置が無い場合は、暖房車を連結して客車にスチームを供給する。

暖房車には小型の石炭焚きボイラーが設置されている。このボイラーは、明治の機関車のボイラーの再利用もあると聞く。老機関車が引退後、第二の仕事に就いている事になる。

電気機関車の引く列車であっても、冬は石炭の煙を吐きながら走る事が珍しくなかった。

風と煙を伴にして

—1960年代 汽車の旅—

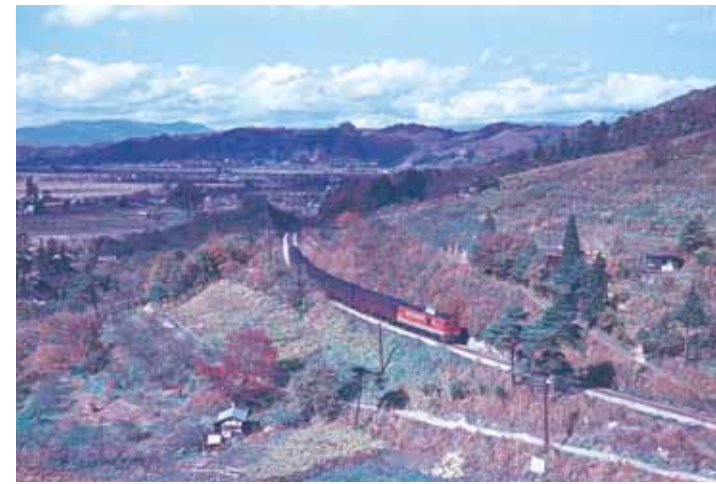
第三版（完結編）



・奥羽本線

赤湯 — 中川

米沢盆地を後にして、峠道を登る福島発秋田行き普通第423列車。



・米坂線

羽前沼沢 — 伊佐領

トンネルとトンネルの間の深い峡谷を渡る米沢発坂町行き普通第127列車。



仙山線の列車が山形に到着。奥羽本線の福島行き普通列車に乗り換えて、山形盆地を南下する。車窓の左には、熊野岳（一八四一m）を主峰とする蔵王の連峰を眺める。山形盆地が終わり、峠を越える。ぶどう畑の続く斜面を横切って、坂を駆け下ると、眼下に米沢盆地が広がる。水田に囲まれた小さな湖、白竜湖の水面が光る。大昔、米沢盆地が湖だった頃の名残りである残存湖といわれている。米沢に到着。福島行き列車は機関車を電気機関車に替えて走り去る。貨車と客車の混合列車が待つ米坂線のホームへ行く。

（昭和四十年）